協賛企業賞

小さいプランクトンから学ぶ環境問題

六本木中学校　小松崎　真麻

「えっ！魚って食べられなくなるの!?」

暑い猛暑の七月二十九日、インターネットでニュースを見ていた私は叫んだ。私の見たニュースは今朝更新されたばかりのホットなもの。読売新聞の「植物プランクトン四割減、食物連鎖に影響も」という記事だった。

植物プランクトンは、人工的に排出される量の三分の一にあたると言われている。年間約二十億トンもの二酸化炭素を吸収してくれる働きのほか、魚が食べる動物プランクトンの餌となり、食物連鎖の基盤を支えてくれている。

そもそも、海の食物連鎖というのは、最下層の植物プランクトンや海草などからはじまり、それを食す動物プランクトン、その動物プランクトンを食す小魚や貝、またまた、それらを食す大きい魚たちで構成されている。つまり、一番下の植物プランクトンがもし、いなくなっていってしまい、それらを食べている魚などが減少していくと・・・私達は魚が食べられなくなってしまう！　人一倍、魚が大好きな私は改めて「地球温暖化を、なんとしてでも止めたい!!」と強く思った。

また、植物プランクトンはそれ以上に地球温暖化にかかわっていたことが分かった。植物プランクトンは植物というその名のとおり酸素を出し、二酸化炭素を吸収するという地球にとってとても大事な役割を行っているのだ。

しかし、そのプランクトンが減少した原因は皮肉にも、私たち人間が引き起こした地球温暖化だった。地球温暖化現象のうちの一つ、海面上昇。なんと、意外にも海面上昇がプランクトンを減らしていた。海面上昇は小さな島国の人々だけの問題ではなかったのだ。思えば、地球温暖化といっているが地球に直接関係のあることは少ない気がする。ほとんどの問題になっていることが、私達人間が生きていけなくなることを中心に問題視されている。砂漠化は人が住む場所が減る。酸性雨は、人体や人のつくったものに危害を加える。水質汚染は私たちの飲み水が汚くなる。一八〇〇年代に産業革命が始まってから、わずか二〇〇年の間に私達人間は楽で便利な生活をしようといろいろな発明や工事をしてきた。そのしっぺがえしが地球からきたのではないか、と私は考える。

実際、私の家の近くの家電製品屋へ行くとエコポイント、また、テレビを見ていればエコカー補助金、買い物に行けばエコバッグなどと、私の身のまわりには、「エコ」という言葉であふれている。けれども、私はあまりエコに意識して気をつけたことが無かった、

しかし、だからといってほっといては、私の大好きな魚が食べられなくなってしまう。そのため、私は行動に出た。といっても、それは地味なものだった。夏休みの間、クー

ラーを二十六度から二十八度にするというものと、ペットボトルは買わずにマイボトルと呼ばれている水筒を使うというものと、買い物の際はエコバッグを持参するというもの、これら三点のみだ。本当に地味な活動だが、やらないまま魚が食べられないよりは、やって食べられない方があきらめがつく。だから私は、周りの人にもこのエコ活動を勧めていきたい。

未来を生きる子供達が、大人になった私達がおいしい魚をお腹いっぱい食べられるようにこれからも「エコ」活動を続けていきたい。